

デイホスピスにおけるソーシャルワークに関する一考察

ー療養通所介護の臨床からー

○ 医療法人社団崇仁会 船戸クリニック 療養通所介護 天音の里 氏名 松久 宗丙 (006214)

キーワード：エコシステム構想 End of Life Care 支援ツール クリニカル・データ・マイニング

1. 研究目的

療養通所介護は、2006年の介護保険制度の改正において創設された制度であり、医療ニーズと介護ニーズを併せもつ在宅の中重度者を地域で支えるための通所サービスである。いわゆるデイホスピスと称されることもある。これまで医療や看護を中心に発展してきた経緯があり、難病等の重度要介護者やがん末期の利用者を対象としている。人生の最終段階にかかわる福祉サービスであるのにもかかわらず、療養通所介護の人員配置基準では、ソーシャルワーカーは必置ではないことを課題としてあげておかなければならない。

そこで本研究では、デイホスピスにおけるソーシャルワークの実践事例を実証的に考察することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究では、療養通所介護を利用する利用者A氏（筋萎縮性側索硬化症）とソーシャルワーカー（社会福祉士）との参加と協働による支援過程をエコシステム構想におけるEnd of Life Care支援ツールを活用して考察する。

End of Life Care支援ツールは、生活というひろがりを実体 に即して把握する枠ぐみとして、End of Lifeに焦点化してとらえるため、「領域」「分野」「属性」「内容」へと階層化している。具体的には、End of Lifeを「領域」として人間と環境に2分割、「分野」として利用者・基盤・周辺・支援に4分割、「属性」として特性・問題・身辺・家族・近辺・資源・機関・ネットワークに8分割、この属性の下位に、その「内容」を浮き彫りにする32因子をもって構造化している。さらに、32因子の内容を掌握するため、実践の構成要素である価値・知識・方策・方法の4側面からとらえた128因子の質問項目を整備している。

本研究では、考察の方法としてクリニカル・データ・マイニング（CDM：Clinical Data Mining）を用いることとする。本研究でCDMを採用する理由として、本研究は実践に基づく研究（Practice Based Research）であり、療養通所介護におけるソーシャルワークに関する研究は、その蓄積が十分とはいえない状況にある。このような研究数の蓄積が少ない領域では、臨床から帰納的に実践・理論を積み上げていくことが重要であると考えられる。とくに、近年の個人情報保護に関する意識の高さから研究者であったとしても現場の切実な状況や資料を入手しづらいといえよう。換言するならば、臨床に身を置く実践者であるからこそ扱うことのできるデータであるといえる。これは、実践者ー研究者（researcher-practitioner）であるがゆえに普段外部に出ることのない資料等から必要な

情報を掘り起すことで、独自の知見が得られる可能性が考えられる。

3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会の研究倫理規程にもとづき、本事例における個人名や施設名は、アルファベット表記や仮名とし、個人が特定できないように配慮した。なお、利益相反はない。

4. 研究結果

End of Life Care 支援ツールを活用することでこれまでの勘や経験にもとづいた支援から科学的支援展開が可能となった。具体的には、ケアマネジャーからの情報提供書と初回面接をもとに入力し、生活情報をビジュアル化した。情報提供書や初回の面接では、A 氏の病気に対する受容が不透明であること、それは生きがいへも関連しレーダーチャートの広がりとして小さかった。また友人や近隣とのかかわり、地域とのかかわりについての情報量が不十分であり、それらがレーダーチャートに反映されていることが明らかであった。A 氏は「こうやって自分の生活を目に見えるかたちで表すことができるんやね」と関心を示したことについて、生活というところのない実体を部分的にビジュアル化して提示することで本人の生活認識とソーシャルワーカーの認識との違いやズレをきっかけにして共通認識を促進し、より深いニーズへと迫ることができた。

5. 考察

デイホスピスは、入院・入所型のホスピスとは異なり、通所型であることから利用者の生活の基盤は住み慣れた在宅である。すなわち、地域も含めた広い視野と発想から支援が展開され、疾病や疾患の治療に焦点を当てるのではなく、その人の生き方に焦点を当てている点に特徴がある。それは、まさに End of Life Care における End のもつ意味が、最期のみではなく人生の目的としての支援に意味があるということである。そのためには、生活を包括・統合的にとらえるソーシャルワークの視点が不可欠である。

本研究では、ソーシャルワークの支援方法として、療養通所介護において、End of Life Care 支援ツールを活用することで A 氏の生活とソーシャルワーカーがとらえる A 氏の生活のズレを共有して互いに理解していく科学的支援とそこから得られた情報をもとに A 氏にとっての生きる意味や価値を支える実存的支援が可能となると考えられる。さらに家族の参加と協働から家族の絆の再構築へとつながった。すなわち、科学性と実存性の視点から支援過程を考察したことが本研究のオリジナリティであると考えている。

しかし本研究は、一事例を考察したものであり、般化することは今後の課題である。これからも、実践者一研究者であることをたいせつに、臨床から理論構築を考察し、わが国における療養通所介護の発展に寄与していきたいと考えている。